

現代の“こんじょう”が生みだすもの

戦後民主主義を考えるにあたって現在の“こんじょう”を大松イデオロギーにみる。そしてその根性が生みだすのは何かを考えてみる。



はじめに

戦後二十年はまたたく間に過ぎ去った。戦時中、あるいは終戦直後にうぶ声をあげた我々は、最早、煙草を吸い酒を飲む青年に成長した。

その間、アメリカの占領政策により日本資本主義が独占資本主義を復活し、さらにアメリカ帝国主義のもとで独占資本主義が国家独占資本主義へと進展し、一九六一年以後、いわゆる新安保体制によって日本独占資本が帝国主義の様相をますます露骨に表わしてくる現在となった。

下部構造が上部構造を規定するという基本的テーゼにのっとり、ていえば日本資本主義が常にアメリカ帝国主義と結びついており、そうであるならば「物質的・生活の生産様式は社会的、政治的、精

編 集 部

神的生活諸過程一般を制約する。人間の意識がその存在を規定するのではなくて、逆に人間の社会的存在がその意識を規定するのである（マルクス、経済学批判）という唯物史観のテーゼによって、アメリカ帝国主義＝日本資本主義という等式が機械的に成立する。

この等式記号のところにおいて日本国民が主体的に政治、経済に参加しなかったのか、したのか、ということが問題になるわけであるが、山田宗陸氏は「戦後は専制と戦争への否定として二十年の歴史を歩んできた。この戦後を否定することはもう一度専制と戦争の道を歩いてきた維新百年の枠組のなかに日本をはめこむことになる。三年後一九六八年は、明治維新百周年にあたる。このチャンスをめざして、いろいろの戦後否定の声が一つに合わされようとしている。維新百年が勝つか、戦後二十年が勝つか。そ

それは実に日本の将来がかかっている。わたしは戦後二十年の側に賭ける。賭けて戦いたいと思う。」(危険な思想家)と述べている。等式記号が成立する条件が存在することは、ゆがめぬ事実ではあるが、そこにおいていわゆる機械的に成立するというところに矛盾の立脚する価値基準を置くならば、そして、そこで日本国民の意識結果として戦後民主主義は「陳腐」で「虚妄」であったと判定するならば、独占資本主義のもつ諸矛盾が打ちだしてくるか、くりの落し穴に転落してしまふ危険性が十分にある。

即ち、それはフアンズムへの道、戦争への道の軌道に乗せられる結果となりかねない。諸矛盾が打ちだす思想攻勢が大衆に及ぼす影響は想像にかたくない。

戦後二十年、大衆社会状況においてマス・コミュニケーションを媒体として、又教育の国家操作として最も注意を要するのがいわゆる近代主義である。近代主義思想は主としてプラグマティズム、実存主義をさす。

それは古代的観念論が資本主義社会の背景をたずさえて、その側面から即応的形態によってできた近代的観念論に他ならない。当然、それが観念論ならば、すべての現象を自己の内部に還元してしまふ「エゴイズムの追求」となつてあらわれてくる。

「エゴイズムの追求」が徹底してくると、国単位でエゴを追求してくるようになるのは、必然である。本来、現象を本質的関連にこそ分析すべきであるのに、近代主義イデオロギーは全く異質の原理体系から説明の糸を導き出して、ただ単に、現象面だけを分析しようとする有用性のみをポイントに置く哲学である。それが戦後二十年間のイデオロギー攻勢の主流である。

問題、経済問題なんか俺の関与するところではない、政治は政治家にまかしておけばいいんだ、というような態度が認められ、又学生にとつてもこの社会への自己目的の焦点がぼやけており、よしんばあるにせよいかにそれが矮小化されているか(展望十三号、現代学生の憲法意識と行動原理)が指摘できようし、「なぜならば」の命題がこの資本主義国家社会で安定した生活をするための立身出世をするための、金科玉条の行動指針となつていふこともいえよう。焦点が明確ではないとすると「為す」と「成る」との矛盾の間に身をさらしていることになる。そこに「主体性の欠如去々……」といわれる要因があり、現象の本質的把握、関連をみのがしていることに気がついていないという指摘がでてる。フアイトがある、粘り強い……の意味の根性そのものについては何もいうことはない。一つの目的に向つて邁進する姿は美しい。ただ戦後二十年後に改めて「根性論」が社会関係を通して現われ始めていることに天皇制イデオロギー時代「天皇陛下万才」と叫んで死んでいった兵士達の「根性」に接近し、えたいの知れない精神構造になつてしまふことに多分に危険性を感じるのである。そこで大松イデオロギーを例にとつて「根性論」なるものを考へてみたいと思う。

大松博文著「おれについてこい!」が第百版も発行する程、ロングセラーになつたのはなぜであろうか。

一九六四年十月二十三日、大観衆をうずめる駒沢室内競技場。熱気をはらみ、マッチ一本をすつても爆発しそうな空気が充満しているなかで、小さな長方形のコートの中で美しい十二の女性の

そういう攻勢の結果、次のようなことがいえるであろう。

戦後民主主義が、民主―封建という対比で表わされ、それがもつばら私生活面にみに有効に働きながら、公的生活においては多数決という形式をとりさえすればよい、という形式主義以外の何物でもなかったことは否定できない、ということ。そして民主―封建、平和―戦争、の対比はいつの間にか繁栄―貧困、平和―乱暴の対比に変わっていき、大衆は個人的、私生活の充足を追い求め、社会的、共同体的歴史の合法則性に従うとする理性が失われてしまふ、ということ。

企業においては、ヒューマン・リレーションズと呼ばれるものも近代主義的管理理論であるし、又教育面においては、一九四八年、文部省発行高校用教科書「民主主義」というものにしても、最近に到つては「期待される人間像」の中間報告に近代主義的思考方式が顕著に表われている。

さて、ご存じオリピック以後、人気投票ナンバールワン、元日紡貝塚バレーボール団(?)の監督、大松博文氏に御登場願うわけですが、彼の信念「根性」も近代主義イデオロギーの範囲を出ない。だが彼自身そのものを問題にするよりここで大松イデオロギー「根性論」がコミュニケーションに乗つて、戦後二十年たつたいま民衆に何の抵抗もなく甘受されたというところに、戦後民主主義(下からの民主主義だが)が集約的に表現されてはいないだらうか、ということである。

そのことは彼の著書「俺についてこい!」なせばなる」がロングセラーを続けているということでも判断できよう。即ち大衆は「政治」「経済」を単に一面的にししか把握しておらず、つまり政治

肢体が躍動している。

しなやかな細い腕から想像できない程、猛烈なスピードで弾丸のようにバレーボールがコートにつきささる。13―6からじりじりと追いつけるソ連チーム、粘膜がカサカサになった観衆は、手に脂肪を浮かべ、精力を吸いとられて、痴呆状態さながらの観を示しながらじっと凝視する。そして勝負はソ連チームの反則によつてあつてなく決つた。審判の手があがり、電光掲示板が14から15にかわり、わきあがる拍手と歓声の中で、ひとかたまりになつて泣きながら抱きつく六人の群。感動の一瞬。このような状況のなかで観衆は、大衆は何を考え、何を感受したのであるうか。

もともと「スポーツ」という語は、disport「気晴し」から派生したもので、その意味においては利害関係にもとずいてそれを職業とするプロスポーツなどは歪曲された形ではないが、歴史が進展するにしたがい、経済状態が向上してくれば、職業の分化にともないスポーツもまた利益集団の性質を帯びてくるのは必然であつたことは過去の歴史が示している。いわゆるレジャー産業としてのそれである。

さてこういう事実を前提とするならば、レジャー、経済的余裕をもたなければスポーツをすることはできない。現代独占資本の生みだした経済的二重構造が、中小企業などの倒産等に認められるように、そこで生産過程に従事し、低賃金労働にあえぐ労働者が、現社会状況において、スポーツをすることがいかに困難であることは当然のことであろう。私有財産を認め、競争体としての現経済体制は、その必然的な結果として、スポーツが宣伝材料としての価値をもつてくるに至り、純化された意味でのスポーツは

「気晴し」の意味でしか存在しない。学生のスポーツにおいてもしかり。学校経営、株式会社という私学について考えてみればうなずけないことはない。過当競争がさせる宣伝材料としてのスポーツは利潤をあげる利益集団である会社組織の一翼をになうものならば、本来の意味においてのスポーツとしてはおよそかけはなれたものになる。

その端的な発言として、日紡が会社の方針としてバレー部を創設する時の社長の言葉である。「現在の世界情勢をみてみい。アメリカとソ連がずば抜けて国力が強いだろう。……スポーツで制覇することは、そのまま、世界を制覇する実力をもつちゅうことになる。……どんだん強くなっていけば、世間から日紡の社運は隆盛とみなされ、弱ければ、衰退の一路をたどっているとみなされる。……わが日紡バレーが強くなれば、社運も隆盛になり、日紡の隆盛は、バレーを強くするじやろう」（おれについてこい）

このスポーツの社会性（？）をアメリカとソ連との「力の均衡」、二つの経済体制の問題に発展させるこの社長はなかなかの説得者であるが、こういう世界の情勢論、現象論の見方でもってスポーツの正当性をとくのはそれこそ正当ではない。

さてこういうスポーツ社会状況と労働者、大衆との関連性、目に見えない会話は、対象から一本の空気のパイプを通して波状してくる光の波が自己にスポットをあてそしてそれが逆流し相互関連作用となされると思う。ここでいう対象とは選手達のこと、自己とは観衆（大衆、労働者）のことである。

即ち選手の労働成果（スポーツの勝敗）がパイプを通じて自己に還元され、自己に外化されて選手に自己の幻影を投影する。そ

なものに高められたようにみえ、承先は当然、対象の操縦者である大松氏に向いたのである。一般に観劇者は人形を通して操縦者を見るのでありその人形が出来なものであれば、いかに操縦者が傑出した者であっても通り過ぎてしまふチャッカリした現実的性格をもっている。マス・コミの宣伝のつて我らの英雄、大松博文は、競技場の枠内をこえて、今度は大松博文という対象と自己との会話が始まるわけである。ここに現代の「英雄主義」というもの、それはとりもなおさず、自分も英雄になりたいと願望するエゴイズムというものをチャリとスカートのすそから垣間見たような気がする。現在の大衆精神構造の突出部をのぞきみたような気がする。

「英雄」なるものに憧憬する底に大衆社会状況の欲求不満が潜在的にあるのではなからうか。

※

※

さて英雄である大松のイデオロギー「根性論」の骨体をなしているのは、彼の苦しい戦争体験からひきだした一種の経験である「なせばなる」ということは周知のとおりである。そして「なせばなる人間の日常を生きたためには、なにに従事しても、自分自身のためにやらなければならない、いわゆるサラリーマン根性ではないけない、ということでした」といっているが、我々が最も考えなければいけないことは、ただ単に努力するということではなくて、何に向って主体性をもって努力し行動するかということではないか。根性をもって真に自主的にすることが失われてしまったのではないか。ここで「真に」という言葉を使ったのはえてして我々は「自主性」というものが上から与えられて、すなわち与

れが心理的に興奮すればするほど、透視図的に拡大される。それで選手達と一心同体という意味も理解されようし、一喜一憂という表現もでてくると思うのであるが、その意識は対象と自己とが一致している時は、即ち対象の行動と外化された自己の無意識的行動とが一致している時は穏当な会話がなされているのであるが一度破れると会話はとだえてしまう。そしてそのパイプは現社会が規定したフラストレーションによって破壊されてしまう心理的作用に転化する。

安部公房氏が面白い的を得た表現をしている。ボクシングの試合場で周囲をとりまく異様な熱気にふくまれていた独特な頼魔感に注目する。観衆の病的なわめき声をきいて「これは兵士に對する下士官の叱咤である」「世界タイトルマッチは、ランク上位者を多数かかえているアメリカでもないかぎり、ほとんどの場合外国人とおしの闘いになるわけだが、しぜん愛国心が刺激され、このときばかりは下士官連中もさすがに加虐趣味を捨てて心から拍手を送ることになる。だがその心境は、けっして英雄をたたえる無名の民衆のそれではない。外見はどおであれ、その内心はあくまでも叙勲査定委員会のメンバーにでもなつたつもりなのだ。チャンピオンがたてた手柄に對して、上官が兵士の肩を叩いてやるくらいの寛容さを、たまたま発揮してみせただけのことである」と指摘している。

幸いにして聖なるオリンピックゲームで日本女子チームが勝つたことよって、日の丸をメインボールにあげることができたので観衆はその会話を中断させずにすんだらしい。そして愛国心という無形の力の介入によって、フラストレーションの解消は高次えられた目的に向って「自主性」をもつようにしくまれてしまつて、それが虚偽の「自主性」とは意識せずに行動するのである。「組織の中における一人間・一個人」の問題は人間がバラバラに存在して互いに無関係のように外見は装いながら一度秩序性を帯びるやいなや強大な無形の力で、頑丈な細い糸でガラス張りの家をしばられ、組織という数と量との力人間を圧迫している点にある。本来、現代文明の所産であるものがそれに反して人間疎外状況を招くこととなった。

戦後民主主義がなした恩恵の一つに「私的権利」があるが「自分自身のために」ということを強調しそれを徹底的に追求していけば「エゴイズム」の追求と類似した形となり、エゴとエゴとが衝突しあって現在施行されている受験制度のように排他的、独善的になり、それが上からの操作によって枠にはめられるならば軍国主義の復活となりかねない。

そしてそのようになれば組織に身をゆだね、受動的活動を強いられることになる。大松は旧軍隊式にはんのわずか近代医学、科学の合理的方法をとりいれ六つの駒を動かしていた感じがする。さらに大松の諸特徴を調べてみれば、生産性向上運動以後、天皇制イデオロギーに代って独占のイデオロギー（近代主義イデオロギー）の特徴が顕著に表われていることに気がつく。大松は勝負に勝つため、創意・工夫を積み重ねその結果として回転レーンを生み出し俗にいう大松一家というような家族的ムードを盛りあげている。これは独占が技術革新により、創意と工夫にとんだ、その場、その場で物事を手早く処理する応用型の人間を求め、各労働者が生産能率に大きく影響するようになり、そして労働者が

不満をいいたすようになり、その生産能力を向上させる為、会社全体を家族的ムードですっぽりつつみ（労使協調等）階級対立を解消させていこうとする方向は、大松のもつイデオロギーと酷似している。大松イデオロギーがもてはやされる原因もここにある。例えば「わたしは選手たちに、日課だからとか、会社のいいつけだからといった気持ちになるな、いつもいいいます。自分のために世界一になるんだ、と」わたしは自分のやり方を、わたしと一体となっている選手たちに押しつけます。……中略……いかにつかれた手足であろうとも、わたしは自分の足は自分の意志で歩かせ、手に持たせませす」等々。これでは修身書とかわらないような気がする。こういう信念が会社経営者をして人づくりの秘訣だと思わせるのである。まさに大松自身こそ現代日本の支配層が欲する「期待される人間像」ではあるまいか。「期待される人間像」の中間草案は昭和四十年一月十一日に発表され、いろいろと物議をかもししたが、これが大松氏のイデオロギーと実によく似ている。

「期待される人間像」で問題になったことは政府がイニシアティブをとってやれば「思想統制」にならないか、その可能性の有無に重点的にあらわれていたといえよう。政府が実行することとなるといらぬことでも警戒心を必要以上にだす傾向があるが大松氏の著書「おれについてこい」がマスコミのつってベストセラーを続けていることが大衆の上になす作用は決して小さいものではない。いわゆる近代主義イデオロギーがそれこそ生活に深く根をおろしとらえて放さない接着材のような役割を果すのである。例えば第四章「日本人として」の項で「今日幸福と教養と平和を願わない人はない……中略……真の幸福は自己の才能をのばし、自

己の仕事に打ち込むところから得られる。あるいは人のために奉仕し、人のために尽くすところからもえられる」と「私は「自我を殺せ」と選手によくいいます。自己を犠牲にしてやり抜く精神が人間修業の最良の道であり、進んで人の犠牲になる精神が土性骨、土根性をつくる基本となると思うからです」おれについてこい」と比較する。人間の上位概念を「社会」「国家」と仮定してうがった見方をすれば「人」を「国家」に変えてみると「国家のために奉仕し、国家のために尽くし進んで国家の犠牲になる精神」となって天皇制イデオロギー時代と同一化するともみなくてもよい文章に変化する。ナショナリズムが双方に一貫して流れているのであって、資本主義社会においてはナショナリズムは戦争への道へと進む可能性がある。それだけに恐しい。

時間が許さないのでここで筆を置くが、ここで望みたい思考方法は、現象論、情勢論の観点から見るとはなくそのバックに流れている本質とその関連、相互作用を述べてもらいたいのであり根本から把握することであると思う。

おわりに

私は決してスポーツを否定するものではない。人間が存在するかぎりスポーツは存在するだろう。ただ気晴しとしてスポーツしていること自体楽しいのであるが、ひとたび世界に目を向けてみると、

我々人間同志という同胞が血を流し、何の罪もなく戦争という名において抹殺されている。スポーツは平和があつてこそ真に内

的エネルギーの爆発が人間同志の情感の相互作用として機能し、その意味においてスポーツは正当化され、スポーツ自体の性格上勝敗は生ずるが、明確な意図をもって宣伝に利用されてはならない。

独占が打ちだす諸矛盾に価値をおいてそれを土台として、発展の構造物を構築していく弁証法的思考態度は必要である。混沌とした現代、分岐点に立っている現代、イデオロギーの分裂にしても、それを反映する中ソ米の対立にしてもそれがすぐさま我々の日常生活に影響してくることは明らかである。

このような状況で、アメリカのアジア政策、さらに自国のドル危機にかこつけて、自由主義陣営の一角を占める日本は帝国主義国として反共防波堤としての役割をになわされている。即ち日韓交渉により日本、韓国、台湾によるアメリカの中国封じ込め政策としてのそれである。ここで反共防波堤云々を問題にするよりも日本がアメリカを親分として帝国主義、ファシズムの傾向がみえつつあることに注意する。

「十七、十八日米韓首脳会談では、中国がベトナム紛争に介入した場合の極東の安全保障問題が重要議題の一つとなろう。米当局者は、中国がベトナム戦争に介入した場合には、朝鮮での戦争が再開されるとみている」（『朝日新聞』五月十七日付）で判断できるようにアジア情勢は、一触即発の危機感にみちている。「朝鮮での戦争が再開される」と日米安保条約の発動により日本も戦火に巻き込まれる、という形式的な見方もできる。

「新しいもの（未来）」から「古いもの（過去）」への逆コースの弁証法は成立しえないにしても、逆コースの過程が一時的に

ても、可能性があるという情勢が現実存在する。

私の問題意識もそこにあつた。軍国主義、ファシズムの復活の可能性である。

そしてそれへの下地が、大衆社会状況において民衆の意識に骨の髄まで浸透してしまふことを恐れたからである。

その単的な下地の亀裂が「東京農大・死のシゴキ事件」であろう。整然とした組織のもとで縦の系列で並び、監督、上級生、下級生で構成され、独裁者である監督、主将の指示によって行動するのであるが、そこには下級生の意見はとりあげられず、およそ民主的運営はなされていない。上級生（主将）からの命令はすべて服従である。なぜなら上級生と下級生という明白な関係に位置づけられ、人間的に対等な、平等な関係にないからである。これは軍国主義的傾向が顕著である。

大部分の運動クラブもいつそれへ転化するかわからない。そしてそれがいつ社会全体関係に転化するかわからないのである。

万年筆・贈写用品・印鑑・印刷金簿

万年筆病院

サヌキヤ

御影町一六筋(神大分校東側)
電話 神戸(85)四〇八七番